

東京音楽大学リポジトリ

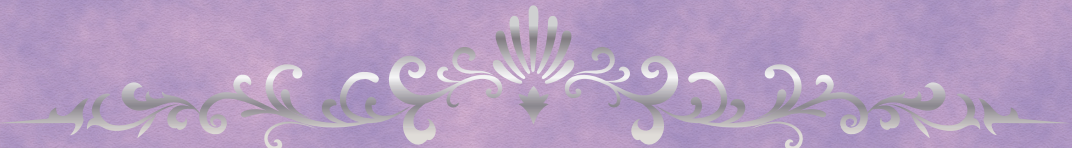
Tokyo College of Music Repository

東京音楽大学附属図書館高柳二葉コレクション

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1065

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

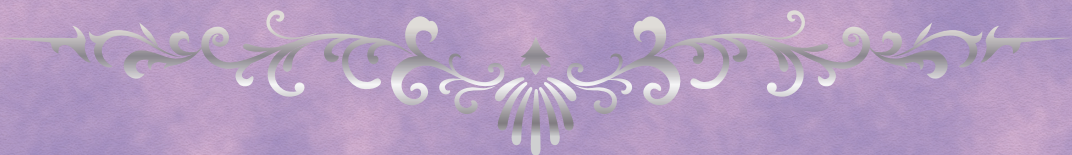




東京音楽大学附属図書館



高柳二葉コレクション



館長挨拶



東京音楽大学付属図書館長
坂崎則子（東京音楽大学教授（音楽学））

このたび「高柳二葉コレクション」としてまとめられた資料を皆様方にご紹介できる運びとなりました。高柳二葉先生は、半世紀以上も本学で数多くの後進を育てると同時に、リサイタル開催、多くのオペラ出演、さらに放送でも重要な仕事をこなされました。このコレクションからは、我が国の洋楽の歩みを読み取ることができ、何よりもひたむきに歌に向かい合い、並外れた努力をされた先生のお姿が生き生きと伝わって参ります。このコレクションの数々の資料を手にとっていきますと、主に昭和の日本の洋楽発展の様相が、血の通ったものとして立ち現われてきます。先生がこの流れの一翼を担ってこられたことは、14頁の年表でご覧になれるでしょう。

このように、日本の音楽界における高柳先生の足跡を辿ることのできる、貴重なコレクションです。どうか本学の学生はもちろんのこと、広く学外の方々にもご利用いただいて、研究に役立てていただきたいと思います。

高柳二葉プロフィール



高柳二葉（たかやなぎ ふたば）先生は、1915年3月28日（大正4年）東京生まれ。

幼少期より歌うことが好きで、教会でも歌っていたそうです。東洋音楽学校（現東京音楽大学）本科声楽科に入学。1937年3月（昭和12年）に同校を卒業し、すぐに声楽科の講師として採用されました。同年11月には第五回音楽コンクール声楽部門に入選しました。

長坂好子、アッテリオ・ベレッティ、エンリコ・ロッシー、山田耕筰、ブルトラメリー・能子、ヨーゼフ・ローゼンシュトック、ネトケ・レーヴェ、ガエタノ・コメリなどに師事。

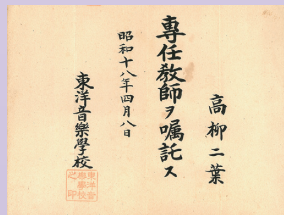
1940年5月（昭和15年）には、初の単独リサイタルを東京の日本青年館で開催しました。また、藤原歌劇団に所属し、多数のオペラに出演しました。

1952年（昭和27年）に始まったNHKのラジオドラマ『君の名は』では、主題歌と劇中歌を担当しました。

1963年（昭和38年）には、東京音楽大学声楽科の教授に就任。1996年3月（平成8年）に81歳で退職するまで、長きにわたって後進の指導に当たりました。

2013年11月26日（平成25年）に逝去されました。

高柳二葉先生の表記は一般的に「高柳」ですが、正式には「高柳」が正しいそうです。本人はあまり気にしていなかったようですが、ご自身が名前を書く時には「高柳」と書いていたそうなので、コレクション名は「高柳二葉コレクション」とします。引用は書いてある表記をそのまま踏襲しています。



東洋音楽学校（現東京音楽大学）に採用された際の辞令。



コレクションの概要

2013年に高柳先生が亡くなられた後、所蔵しておられた資料がご遺族より寄贈されました。楽譜やLP、書籍をはじめ、写真のアルバム、戦時中の慰問の時の感謝状など多様な資料がありました。先生ご自身が出演された演奏会のプログラムをはじめ、先生が足を運ばれた演奏会のプログラムも多数あります。

楽譜には、作曲家から直接いただいたと思われる自筆譜、また、先生ご自身が筆写した譜面などが含まれています。一部の楽譜には、先生ご自身による書き込みがあり、演奏家がどのように譜面を解釈したのか、その一端をうかがい知ることができます。声楽の楽譜や対訳は、当館に所蔵がない資料も多く、貴重な声楽レパートリーとなります。

コレクションは、すべて当館 OPAC (<https://opac.tokyo-ondai-lib.jp>) から検索が可能です(但し、一部非公開)。

利用案内

高柳二葉コレクションは、東京音楽大学付属図書館利用規程に則って運用しています。

自筆譜や写真などの特殊な資料については、貸出期間や方法、複写の可否等に制限があります。詳しくはお問い合わせください。

学外・一般の方の利用は事前に申し込みが必要になります。

詳しくは東京音楽大学付属図書館のサイトをご覧ください。図書館までお問い合わせください。



高柳二葉コレクションから

▲▽▲ 古関裕而氏の自筆譜 ▲▽▲

昭和を代表する作曲家、古関裕而氏 (1909-1989) の作品が 25 点所蔵されています。古関裕而氏本人の自筆及び弟子の清書と考えられるものが 24 点あり、残りの 1 点は古関氏の作品を別人が写譜したものです。楽譜はすべて、歌譜のみです。

作品はラジオドラマ『君の名は』と、『君の名は』と同じ菊田一夫氏原作のラジオドラマ『由起子』に関連するものが多くあります。当時伴奏は古関氏が即興で付けたと言われています。

その他にも、NHK で高柳先生が歌ったと思われる古関裕而氏作曲の作品があります。

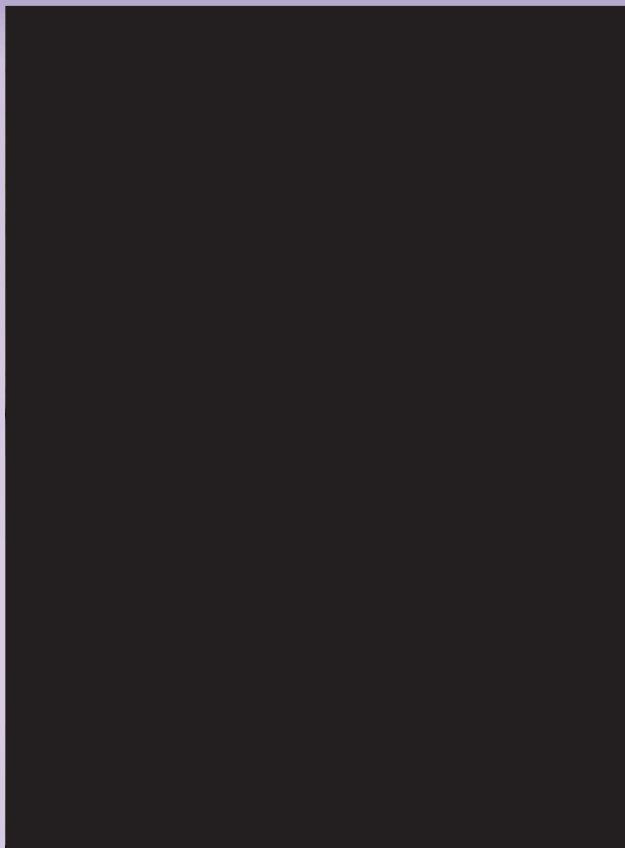


『阿武隈に立ちて』の古関裕而氏による自筆譜の表紙と記譜面の 1 ページ目。

大きさ：31cm

ペン書き。鉛筆による書き込みあり。作詩は木村正夫。

表紙上部に鉛筆で「1965 10/21 1 時 35 分より NHK 午後のひととき」との記述があります。NHK の放送番組確定表には「歌 高柳二葉 「わがふるさと」 - 福島 - 古関裕而」という記載があるそうです。実際に『阿武隈に立ちて』を高柳先生が歌ったかはわかりませんが、歌った可能性が高いと考えられます。



ラジオドラマ『君の名は』テーマ曲の古関裕而氏による自筆譜。

大きさ：31cm

ペン書き。鉛筆、色鉛筆による書き込みあり。作詩は菊田一夫。

当時のラジオドラマは生放送だったために、内幸町にあったNHKに高柳先生は毎週通っていました。NHKによれば、『君の名は』に主題歌はないとのことですが、この曲がテーマ曲と一般には思われています。映画主題歌は、高柳先生から織井茂子氏に変更になりレコード化されたため、高柳先生が歌っている録音はありません。この譜面の2番の歌詞は映画版と違っているため、ラジオではこの歌詞で歌われたのか、あるいは後に変更されたのかもかもしれません。

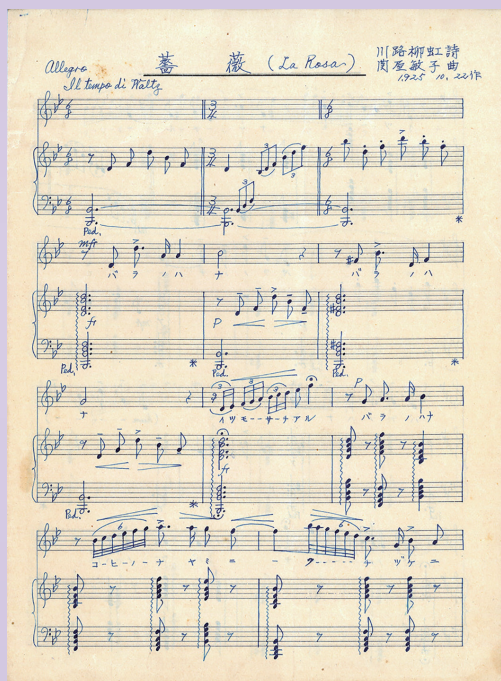
「主題歌は歌謡曲歌手ではなく、クラシックの音楽家に歌わせたい希望を菊田さんも私も持っていたので、妻の友人の高柳二葉さんを選んだ。高柳さんは藤原歌劇団に所属し、東洋音楽学校の教授をしていた。妻は昭和二十一年に長男を出産し、私の仕事も多忙を極め、助手たちの出入りも多いため、音楽の勉強に専念できなくなっていた。しかし音楽に対する鋭い感覚は、私のために非常に役立った。高柳さんを推薦したのも妻であり、ベルカントの美声はドラマに品性を添えた」（古関裕而『鐘よ鳴り響け』人間の記録 18 日本図書センター、1997年、212頁）



▲▽▲ 関屋敏子氏の自筆譜 ▲▽▲

国際的なソプラノ歌手として活躍し、歌曲を中心に作曲もした関屋敏子氏(1904-1941)の楽譜が3点所蔵されています。

高柳先生の弟子の若林七郎さんによれば、関屋敏子氏の死後、関屋氏のマネージャーが高柳二葉先生のレッスン室を訪れ、「あなたの声は関屋に似ているから、関屋の作品を歌い継いで欲しい」と言って関屋氏の自筆譜を先生に託したそうです。



1925年(大正14年)10月22日作曲の『薔薇』の1ページ目。

大きさ:27cm

ペン書き。作詩は川路柳虹。

二本松市歴史資料館にこの譜面と同じ筆跡のものがあります。関屋氏が自ら書いたものか、または関屋氏に近い人による筆写譜かはわかりませんが、マネージャーが高柳先生のレッスン室に持ってきた譜面ではないかと考えられます。



▲▼▲ 高柳二葉先生の写真 ▲▼▲



1940年5月10日（昭和15年）に東京の日本青年館で開催された、初の単独リサイタルの写真。演奏は、鈴木鎮一指揮 東京絃樂團。



1946年9月帝劇にて、『カヴァレリア・アルスティカーナ』のサントウツア役。



1949年9月25日、日比谷公会堂。



▲▼演奏会プログラム▲▼

高柳先生ご自身が出演されたプログラムやチラシをはじめ、先生が購入されたプログラムも所蔵しています。オペラや声楽のリサイタルのものが多くですが、その他のプログラムも所蔵しています。



高柳二葉独唱会
ソプラノ

第一楽章
1. 新編心恋
2. ヴィンセント・ワグネル
3. ヴィンセント・ワグネル
4. ヴィンセント・ワグネル
5. ヴィンセント・ワグネル
6. ヴィンセント・ワグネル
7. ヴィンセント・ワグネル
8. ヴィンセント・ワグネル
9. ヴィンセント・ワグネル
10. ヴィンセント・ワグネル

第二楽章
1. ヴィンセント・ワグネル
2. ヴィンセント・ワグネル
3. ヴィンセント・ワグネル
4. ヴィンセント・ワグネル
5. ヴィンセント・ワグネル
6. ヴィンセント・ワグネル
7. ヴィンセント・ワグネル
8. ヴィンセント・ワグネル
9. ヴィンセント・ワグネル
10. ヴィンセント・ワグネル

興出出演 テナー 高田其三
ピアノ 長 好寛
伴奏 東京純音楽
指揮 鈴木組一

5月10日(金)夜7時半
日本青年館

東和ビヤ/商會

推薦の言葉

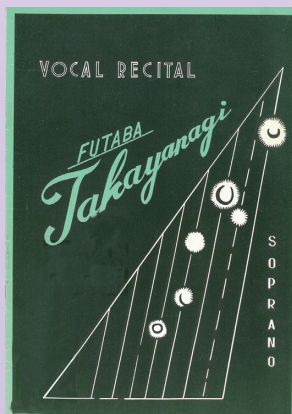
大田黒元雄

音楽コンクールをまだ時事新報社でやつてゐた昭和十一年の豫選の時に、身体の小少なソプラノが中々達者にうたつて見事に最年少者としてパスした。それが高柳二葉さんである。

(中略)

以来二葉さんは益々研鑽を積んで、今度最初の獨唱會を開く事になつた。しつかりした聲で、それにうたひ振りも素直であるから、來るべき獨唱會を大いに期待すると同時に、聲樂界の伸び行く新人として敬えて推薦するのである。

1940年5月10日に日本青年館で行われた『高柳二葉独唱会』のチラシの表面と裏面。裏面中央に音楽評論家の大田黒元雄による「推薦の言葉」(右上参照)が掲載されている。



VOCAL RECITAL
FUTABA Takayanagi
SOPRANO



ソプラノ
高柳二葉
独唱会
ピアノ 大島正幸

1958年
12月12日(金)
読売ホール
指揮 二葉 高柳

推薦のことば 牛山充

東京音楽大学付属図書館蔵

1958年12月12日に読売ホールで行われた『高柳二葉独唱会』のプログラムの表紙と表紙裏と扉。表紙裏に音楽評論家・舞踊評論家の牛山充の「推薦のことば」(下部参照)が掲載されている。

推薦のことば

牛山充

(前略)長い舞台経験と地みちな研究態度で磨かれた高柳さんの芸術にはしつとりとした中に、よく円熟したコクのある美しさがあります。(後略)



推薦のことば

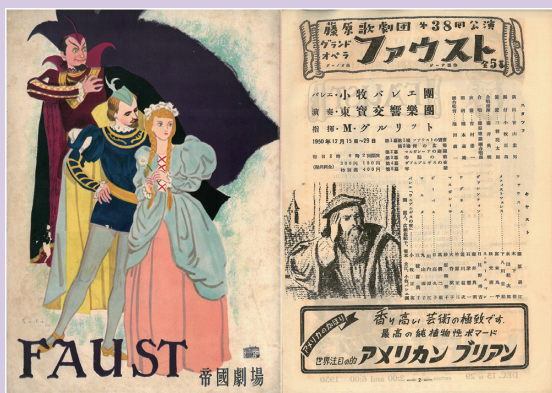
藤原義江

声のころがる人、声をころがせる人の全く少ない日本の声楽界にとって、高柳二葉の存在ははなはだ大きい。

藤原歌劇団が、戦後、歌舞伎座から帝劇へ移って、女史はロジーナ、サントウツツア、ツェルリーナ、等を歌ったが、私には、女史の最高は、ファウストのマルガレーテであったと思う。このマルガレーテは、今日までの圧巻であるとも思っている。

のどころがる人は、舞台の生命が短い、というのが世界中での傾向であるが、女史の場合は、珍しく、そうではない。これは本当に珍しいことであるから、もっと、舞台での活動を続けてほしいと思うのは、私一人ではあるまい。

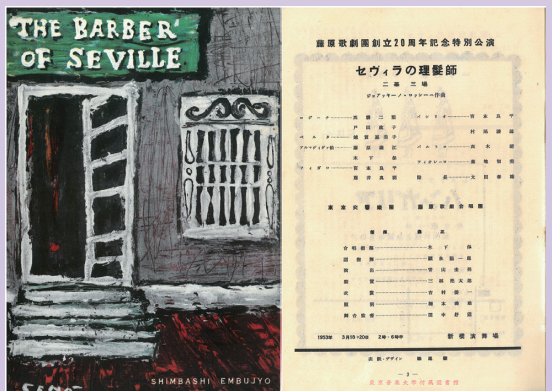
1962年5月15日に朝日講堂で行われた『高柳二葉独唱会』のプログラムから表紙裏と扉。扉には藤原義江の「推薦のことば」が掲載されている（右上参照）。



1950年12月15日から29日に帝国劇場で上演されたグノー作曲のオペラ『ファウスト』のプログラムの表紙と目次。

高柳先生はマルグリット（マルガレーテ）役で出演（大谷冽子・砂原美智子とのトリプルキャスト）。表紙絵は土方重巳。

© 公益財団法人 日本オペラ振興会



1953年3月18日から20日に新橋演舞場で上演された藤原歌劇団創立20周年記念のロッシェニ二作曲のオペラ『セヴィラの理髪師』のプログラムの表紙と目次。

高柳先生はロジーナ役で出演（戸田政子とダブルキャスト）。表紙絵は妹尾肇（妹尾河童）。

© 公益財団法人 日本オペラ振興会



 お弟子さんから見た高柳二葉先生

▲▽▲ 刑部美也子さんインタビュー ▲▽▲

—刑部さんと高柳先生との出会いは？

先生との出会いは、私が大学を受験する前の17才で、それから私が65才になるまでの48年間お世話になりました。その時先生が95才だったので、出会ったのは先生が40代の終わりだと思います。その頃はもう、オペラとかの演奏活動を控えていて、大学の教育に専念されていたと思います。

なので、現役時代の先生の歌声は聴いたことがないのですが、たまに演奏会や発表会の時に聴くことはありました。

大学時代は週1回のレッスンの他に、先生のご自宅にもうかがうことがありました。卒業してからも、先生のご自宅にうかがってレッスンしていただきました。48年間、学生時代はもとより、卒業してからも先生には大変お世話になりました。高柳先生のお弟子さんの会は「二葉会」といいますが、私が教えていた生徒さんの会に、先生のお姉さんのお名前である初葉さんの名前をいただいて「初葉会」という名前を先生がつけてくださいました。

「二葉会」と「初葉会」で合同発表会をしたこともあります。

東京音大の新しいホールが出来たときには、確か声楽の先生方がなされた演奏会だと思うのですが、一緒に聴きにきました。

—刑部さんと出会う前の先生のお話は何か聞いていますか？

先生が音楽を始めたきっかけは、小さい頃毎週教会に行っていて、そこで賛美歌を歌っていたのがきっかけだったと聞いたことがあります。

若い頃のお話としては、先生がコンクールに出場した時、『狂乱の場』を歌ったのだけど、伴奏にフルートの人を連れて行ったら、審査員の人に「フルートはダメ」と言われたそうで、急遽フルート無しで歌うことになったそうです。

それでも、動揺しないで歌ったのだけど、それがなければ1位になれたかもしれないといっていました。

それから、何のオペラかはわからないのですが、主役の方が急病になって、10日前に急遽先生が代役に抜擢されたそうです。その時、衣装合わせして、オケ合わせもしながら必死で覚えて見事代役を務められたそうです。なので、よくレッスンの曲を「なんで覚えられないの？」なんて言われたのですが、確かにオペラに比べたら短いのにと思いました。



—藤原義江さんのことはお聞きになりましたか？

藤原義江さんの思い出もお聞きしたことがあります。

藤原さんは、もちろん男性なのですが、名前が女性みたいなので、地方に行ったときに「藤原義江女史来る」って書かれていたとおっしゃっていました。

それから、藤原義江さんたちとロシアに行ったとき、現地はマイナス40度くらいでとても寒くて、向こうの人はコートを2枚着ていたのよと言っていました。また、納豆なんか食べている日本人と違って、ロシア人は大きなステーキを食べているからか、オーケストラの音が素晴らしかったとおっしゃっていました。

上海に行ったときには、藤原先生が無言でご自分の太腿を指しているから見てみたら、大きなサソリがいたのよとおっしゃっていました。

—その他に何かエピソードはありますか？

『君の名は』の時は古関さんの曲が間に合わなくて、初見で録音したそうです。

先生は、歌いづらいところがあるとパパッと譜面を変えて歌うこともありました。でも、それは、歌詞を活かす形で変更する感じでした。

—高柳先生に教わったことで一番印象に残っているのは何ですか？

先生は良く「自分に投資しなさい」と言っていました。いい音楽ももちろんだけど、たくさん良い絵を見たり、美しいものにふれたりしなさいとおっしゃっていました。

先生ご自身も、演奏会には良く出かけていました。1部は1階で聴いて、2部は2階で聴くこともしていたそうです。それは、歌手の方がどのくらい声を通るかを確かめるといふ意味もあるし、場所によってどのように聞こえるのかを確かめていたのだと思います。



2003年5月25日、新宿のセンチュリーハイアット東京（現 ハイアット リージェンシー東京）で開かれた高柳二葉先生米寿のお祝いの会での刑部さん（右）と高柳先生（左）。



▲▽▲ 若林七郎さんインタビュー ▲▽▲

—高柳先生に習ったきっかけは何ですか？

私が新潟で師事していた近八州子先生が高柳先生のお弟子さんで、私も音大を受験する時にご指導いただき、入学後もそのまま先生にお世話になりました。

—先生のレッスンはどのような感じでしたか？

厳しい先生でした。時間に厳しいのはもちろん、歌のレッスンも厳しかったです。厳しいと言っても、感情を表に出して怒ることは一切ありませんでした。

私が入学してからすぐにアメリカに研修に行かれて「アメリカでは入学してすぐはみんな声が細いけど卒業する頃には良くなっているのよ」と言われていました。当時の日本では、ただ「大きな声を出せ」などと指導する先生が多くいる中で、高柳先生はそういうことはおっしゃいませんでした。

「音楽は美しくなければダメ」と良くおっしゃっていました。例えば「怒り」という感情でも、それをそのまま大きな声で表現するのではなく、一度感情を自分の中で昇華し、芸術として表現するのが音楽だと言われました。

それから、「歌の生徒でも基本はピアノだからピアノを一番時間をかけて練習しなさい」と言われました。実際先生もピアノが上手で、コンコーネなどは声域に合わせてすぐに伴奏を移調して弾いて下さいました。

—先生との思い出はありますか？

先生が東京音楽大学を退職されてすぐ位だったと思うのですが、私が新潟でリサイタルをした時に、新潟まで聴きに来て下さいました。その時に、先生が私の自宅に1泊し、翌日は家内と3人で角神温泉に旅行しました。レッスンの時とは違い子供の様楽しそうにはしゃいでおられた姿を思い出します。その後も新潟を訪ねて下さいました。

▲▽▲ 高橋静子さんインタビュー ▲▽▲

—高柳先生との出会いを教えてください

高校生になり、選択授業で音楽を取った時に高校の先生から「あなたは声が素晴らしい」と褒められたのが音楽を始めるきっかけでした。

私の父が音楽好きで、音楽を習っていたこともあり、音楽を勉強することには反対しませんでした。声楽を勉強したいと言ったら、私の父の同郷の同級生に作曲家の古関裕而さんがいて、相談したところ、東洋音楽学校にいらした高柳二葉先生を紹介されて高校2年生の終わりから習ったのが先生との出会いでした。



—先生との思い出はありますか？

大学時代の先生は「芸術を甘く見るな」というとても厳しい態度で、同級生とはよく「なんであんなに厳しいのだろう」と話したものです。褒められたことも一度もありませんでした。

卒業時には「ここは出発点。学校は基礎を教えるところ。これからが勝負よ！」とおっしゃっていました。

多分先生は私の本質を見抜いていらして、誉めるよりは厳しく接した方が良いと思われていたんだと思います。

実際、教員採用試験に受かったことを先生に報告に行ったら「職を得ることは素晴らしいことよ！」と、とても喜んでくれ、「あなたには厳しいことを言ってきたかもしれないけれど、それは、あなたのためを思っただことだったのよ」とおっしゃってくれました。

その後、教員として中学で教えたり、自宅で音楽を教えたりして、ずっと音楽と関わってきました。それは、先生が厳しく指導してくださった賜物だと思って感謝しております。



1962年9月にお弟子さんたちと撮った写真。前列右端が高柳二葉先生。前列左端が戸沢（旧姓渋谷）喜世子さん。後列左端が若林七郎さん。左から3人目が高橋（旧姓佐久間）静子さん。4人目が村松（旧姓歌代）節子さん。5人目が佐藤（旧姓酒井）東海子さん。



高柳二葉先生年譜

年号	年齢	出来事
1915年3月28日(大正4年)	0歳	東京で生まれる。
1937年3月(昭和12年)	22歳	東洋音楽学校(現 東京音楽大学) 本科声楽科卒業。
1937年4月(昭和12年)	22歳	東洋音楽学校(現 東京音楽大学) 本科声楽科講師就任。
1937年11月(昭和12年)	22歳	第五回音楽コンクール声楽部門入選。
1937年12月8日(昭和12年)	22歳	日比谷公会堂 山本尚忠指揮 高樹次郎演出 グノー作曲『ファウスト』のマルタ(マルガレーテ)役 日本語上演。
1940年5月10日(昭和15年)	25歳	初の単独リサイタルを東京の日本青年館で開催。鈴木鎮一指揮東京絃樂團。
1941年1月20日~22日(昭和16年)	25歳	東京築地国民劇場(旧築地小劇場) 国民歌劇協会「能に取材せる国民歌劇」の3作品のうち加藤光男(光雄)の『狸々(しょうじょう)』と宮原禎二の『杜若(かきつばた)』に出演。
1943年4月3日~5日(昭和18年)	28歳	東京劇場 藤原歌劇団 マンフレート・グルリット指揮 堀内敬三演出 プッチーニ作曲『ラ・ボエーム』のムゼッタ役(杉浦真美子とのダブルキャスト) 日本語上演。
1943年5月28日~30日(昭和18年)	28歳	歌舞伎座 藤原歌劇団 マンフレート・グルリット指揮 堀内敬三演出 ロッシーニ作曲『セビリアの理髪師』のロジーナ役(大谷冽子とのダブルキャスト) 日本語上演。
1943年12月27日~28日(昭和18年)	28歳	歌舞伎座 藤原歌劇団創立10周年記念 マンフレート・グルリット指揮 青山杉作演出 ベートーヴェン作曲『フィデリオ』(日本初演)のマルツェリーネ役(杉浦真美子とのダブルキャスト) 日本語上演。
1946年9月20日~30日(昭和21年)	31歳	帝国劇場 藤原歌劇団 マンフレート・グルリット指揮 青山杉作演出 マスカーニ作曲『カヴァレリア・ルスティカーナ』のサントウツァ役(笹田和子とのダブルキャスト) 日本語上演。
1946年11月2日(昭和21年)	31歳	日比谷公会堂 都民劇場 篠原正雄指揮 柳田貞一と北村武雄演出 アイヒベルク作曲オペレッタ『アルカンタラの医者』の女中イネズ役 日本語上演。
1948年11月20日~26日(昭和23年)	33歳	有楽座 藤原歌劇団 上田仁指揮 村山知義演出 高木東六作曲『春香』の春香役(大谷冽子とのダブルキャスト)。
1948年12月14日~27日(昭和23年)	33歳	帝国劇場 藤原歌劇団創立15周年記念 マンフレート・グルリット指揮 青山圭男演出 モーツァルト作曲『ドン・ジョヴァンニ』(日本初演)のドンナ・エルヴィラ役(滝田菊江・城須美子とのトリプルキャスト) 日本語上演。
1950年12月15日~29日(昭和25年)	35歳	帝国劇場 藤原歌劇団 マンフレート・グルリット指揮 青山圭男演出 グノー作曲『ファウスト』のマルグリット役(大谷冽子・砂原美智子とのトリプルキャスト) 日本語上演。
1952年4月10日(昭和27年)	37歳	NHK ラジオドラマ『君の名は』放送開始。主題歌『君の名は』や挿入歌を歌う。
1953年2月1日~2月8日(昭和28年)	37歳	新宿劇場 藤原歌劇団 森正指揮 青山圭男演出 ロッシーニ作曲『セビリアの理髪師』のロジーナ役(戸田政子とダブルキャスト) 日本語上演。
1953年3月18日~3月20日(昭和28年)	37歳	新橋演舞場 藤原歌劇団創立20周年記念 森正指揮 青山圭男演出 ロッシーニ作曲『セビリアの理髪師』のロジーナ役(戸田政子とダブルキャスト) 日本語上演。
1963年4月(昭和38年)	48歳	東洋音楽大学(現東京音楽大学) 声楽科教授に就任。
1996年3月(平成8年)	81歳	東京音楽大学を退職。
2013年11月26日(平成25年)	98歳	死去。



参考文献



事典・単行本

音楽の友編集部編『日本の音楽家 '68』音楽之友社，1969年

請求記号：M2.88/N5791

古関裕而『鐘よ鳴り響け』人間の記録 18 日本図書センター，1997年

請求番号：M2.8/K846

増井敬二著，昭和音楽大学オペラ研究所編『日本オペラ史』上・下 水曜社，2003年

請求記号：M3.42/M396-2/1, M3.42/M396-2/2

二本松市歴史資料館『関屋敏子生誕 100 年記念特別企画展 世界のプリマドンナ～その栄光の日々』二本松市教育委員会，2004年

請求番号：M2.8/Se47-1

江上優子編集『藤原歌劇団創立 70 周年記念誌 (1934-2005)』財団法人日本オペラ振興会，2005年

請求記号：M0.63/F9551

論文・雑誌

『音楽新聞』1940年四月下旬号第 273号

請求記号：VOn3-27/273

高柳二葉「民謡雑感」『音楽芸術』1951年 11月号，pp.69-70

請求記号：WOn3-2/9/7-12

高柳二葉「生きがいを求めて」『青少年へ贈る言葉 わが人生論』東京編 下 所収（文教図書出版，1994年），pp. 278-280

請求記号：159/W122

CD

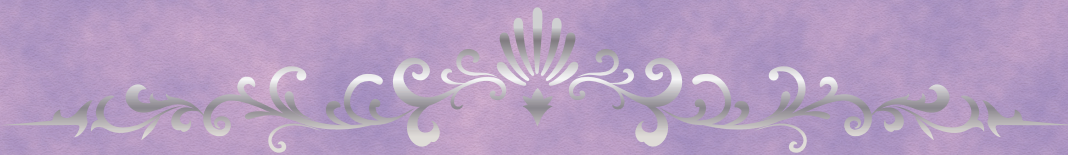
古関裕而全集生誕 100 年記念第 6 巻貴重盤・秘蔵盤 Columbia Music Entertainment COZP-380, 2009年

請求記号：B5347

日本音楽著作権協会（出）許諾第 1602509-601号

表紙写真：1940年 5月 10日に日本青年館で行われた『高柳二葉独唱会』で使われた写真
裏表紙写真：1958年 12月 12日に読売ホールで行われた『高柳二葉独唱会』のプログラム（本冊子 p. 8に掲載）に載った写真の別バージョン





東京音楽大学付属図書館 高柳二葉コレクション

2016年3月発行

協力：高橋弘和、古関正裕、刑部美也子、若林七郎、高橋静子，
公益財団法人 日本オペラ振興会，福島市古関裕而記念館，
二本松市歴史資料館（敬称略）

制作：東京音楽大学付属図書館

<http://tokyo-ondai-lib.jp/collection/takayanagi>

